

第七回海外研修（台灣）報告

もう一つの実践・国際交流

平成9年12月26日～29日、加藤先生以下20名の参加者で台湾への海外研修が実施された。3泊4日という短い日程ではあったが、学校参観も充実し、内容の濃い研修となった。

特に、今回は台湾の関係者の温かい歓迎を受けたことである。台湾の方々国民性にもふれることができた実り多い研修であった。

私たちの訪問は、現地の新聞にも紙面のように報じられた。

報時國中

日三十月二十年六十八國民華中

日本個性教育研究聯盟

上午參觀北市博愛國小

【記者許麗珍台北報導】繼台北市教育局九月初訪問日本五所中小學「開放教育」的做法後，日本個性教育研究聯盟上午訪問台北市博愛國小，參觀國小週末課程活動化的情形。其中「小博士信箱」開放教育的作法令日本學者印象深刻。日本推動「個性化教育」也就是國內所謂的「開放教育」已有二十多年歷史，而台北市推動二年餘的國小開放教育，今年九月教育局曾

遠赴日本取經，參觀日本個性化教育的做法，當時日本學者即表示合於十二月底來訪。上午日本學者參觀了博愛國小週末課程活動，包括圖術、繪畫、編織等，其中日本學者對「小博士信箱」最感興趣，該信箱是由博愛國小教務處、自治會小幹部策劃，每週出一冊，讓有興趣的小朋友找答案，學習解決的方法。

加藤幸次暢談日本教改經驗

鼓舞教界應著重自主性、創造性教育

【宜蘭訊】日本著名的教育改革「推手」加藤幸次，十九日在教育局安排下，在宜蘭國小向國小教師暢談日本的教育改革經驗，期待老師們以更開放的心懷，面對下一代的教改。

著有「一所沒有牆壁的學校多多」等多本著作的加藤教授，是上智大學教育學教授，也是日本開放教育的啟蒙者，多年來在教改上的努力，使加藤教授被視為教改觀念的導師級人物。這次教育局是獲悉加藤來台，透過安排邀請加藤抽空來宜演說。

加藤教授以日本的教改經驗，佐以影片印證其學理，並鼓舞在場教師在觀念有了之後，還應繼之以行動，教育才有明天。加藤表示，日本與台灣一樣，以往都是認為教育水準落後於西方，因此從教學方法、教材到教育環境，都是採取「填鴨」式教學，但事實上，目前日本、台灣等亞洲國家，教育水準已經不比西洋差，甚至有部分學科還超越美國。在此之下，應該著重的是發展自主性的、創造性的教育。加藤在演說中特別重視營造開放式的教育，並指出，以日本1995年展開的教

育改革，先是以國際化為著眼，再是發現國際化之餘，仍必須有統合性的教學，以往界限分明的各科教學，在日本已經有統合一起學習的現象，再是資訊化的此刻，日本學生已經不再那麼重視加減乘除的演算，因為這些都可交由電腦解決。因此要求大家從教材的統合改變，以及以學生為中心的教學，視學生的個別條件，創造適性教育。教育局課長陳國章聆聽加藤教授演說之後，指出宜蘭縣未來也會有開放式的學習環境，但是實質的教學仍有待教師在理念與行動上同時跟進。

向宜蘭小學老師提供日本教改經驗的加藤教授，強調開放教育是改革的動力。(陳廣堯攝)



天母国民小学校を訪問して

今回の最初の訪問校は、児童数約2800人学級数約90学級、教職員160名の学校である。

台北では普通規模の小学校である。日本の学校に比べて学級規模は大きい。1学級35人以下を達成している。

まず、小学校のカリキュラムの編成について、自己教育力向上の取り組みについて説明を受けた後、構内を見学して回った。この学校では、子供の興味に合わせた授業の展開、自己教育力をつけるプログラム、図書館・情報教育に力を入れている。また、親も積極的にボランティア活動（図書館の貸出事務処理や教室の整理その他）に参加している。

授業参観は図書の分類を学ぶ場面であった。図書館教育に力を入れているだけあって、子供たちの発表も身振り手振りを入れて表情豊かにされていた。また、夏休みの自由研究の展示では、自分の興味を持ったテーマに向かい、図書等の資料を使い、熱心にまとめた本を見ることができた。（兵庫・谷口）

落ち着いた雰囲気为天母小学校

校舎全体に花や緑が豊富で、ごちゃごちゃした感じやざわつきがなくマンモス校と聞いて抱いていたイメージとはかなり違った印象を受けた。1年生の教室は後方にカラーマットが敷かれおもちゃなどが置いてあった。

学校側から『幼小、小中のつながりを大切にしている』という話があり感激してしまった。

小学校の教師が幼稚園を見学し、子供のペースやリズムを理解して、子供が自分で時間の使い方を考えられるように支えるのだそうだ。

中学生が母校を訪ねて交流することもあるようだが、言葉の壁もあり、詳細が理解できずに残念だった。父母や地域のボランティアが教育に参加する例はよく聞かすが、年代が近いからこそ力になれることもあるのではないかと思った。

（千葉・小山）



図書の分類学を学ぶ（発表会）



台北市立建国高級中学校を訪問して

開口一番、学校の規模に驚いた。建国中学校は日本の普通高校にあたり、生徒数（男子）5352名、学級数117、教員数336名である。

そのうち「進級補校」という学級が含まれている。4階建ての教室の他、2000人収容の「学生活動中心」と呼ばれる行動などが8つの「～楼」（Building）がある。卒業後は大学または専門学校に進学する。落ち着いた雰囲気は伝統と校風を重んじるエリート校を感じさせる。

教室自体は日本と変わらないが、あまりの広さに校舎そのものをうまく説明できないのが本音である。ただ、印象に残っていることは地域の人や子供たちが校庭で思い思いに過ごしている午後の風景だった。土曜日の午後は市民に開放しなければならないのだそうだ。

教育の関心の高さが生活の環境アップにつながると話す校長先生の話通り、父母や地域への積極的な関与や開放教育をすすめる台北の教育改革の大きなうねりにふれたような訪問だった。（青森・石澤）

教育局の熱烈歓迎を受ける

博愛国民小学校を訪問した後、午前11時半、全員で台北市政府教育局を表敬訪問。あいにく呉英璋教育局長は所用のため、代わって劉寶貴副教育局長が応対。通訳を通して歓迎の意を賜った後、訪問団を代表して高浦が謝意を述べた。

なお、江蓋世、李仁人両台北市議会議員が同席された。

その後、昼食会に招待され、美味しい台湾料理を食べながら教育談義に華が咲いた。昼食後建国高校で台湾の教育の歴史と現状に関する講話を聞いた後、午後6:00からの台湾開放教

育研究メンバーと交流夕食会に赴いた。

呉英璋会長（教育局長）、劉寶貴副教育局長をはじめ約40人にのぼるメンバーが各地から参加され、日本側出席者20人も加え、円形テーブル5つに、ところ狭しとばかりに両会員

入り交じり席を占めた。呉会長の歓迎の挨拶、加藤先生の謝辞、高浦の乾杯の音頭の後、美味しい台湾料理、紹興酒に舌鼓を打ちながら、両国の教育談義も交えた楽しい会食となり、予定の2時間があっという間に駆け抜けていった

（東京・高浦）

開放教育学会の方々との夕食会



榕樹並木の台北日本人学校

天母国民小学校を後にして、貸し切りバスは一路、士林をめざして走り出した。台北の空は朝から晴れ上がり、ワイシャツ姿でも外を歩くと額に汗がにじみ出てきていた。

予定時刻よりやや遅れて台北日本人学校の門前にバスは横付けされた。歩道には榕樹の並木が異國情緒を漂わせており、正門横には守衛さんのいるボックスが設置されており、上手な日本語で私たち一行を敷地内に通してくれた。

迎えてくださった佐保教頭先生から学校の現状と課題が話された。全職員は71名、児童・生徒は計925名で、平成元年をピークに逡減傾向になっている。年間240名くらいの転入・転出の子がおり、教頭は職務のほとんどをそ

れに費やしている。授業料の半分以上は、校舎敷地の借地料に当てられ、子供の数の減少に伴い、経費の面で困難さが出てきている。（私は授業料と聞いて、あれ！と思ったが、台湾では日本人学校は私立扱いの学校であることに気付かされた次第）

特に印象に残ったのは、海外の教育施設は、日本の経済動向と密接に関連していること。労働力の安いところに経済（企業）が進出していくので、これからはベトナム等の東南アジアに日本の経済界の目が向いているということであった。経済界と密接に結びついている「海外日本人学校」。これらの話を背景に児童・生徒数の推移グラフに見入った。（神奈川 富山）

博愛小学校に見る台湾の施設について ・・・地域の「核としての学校」

博愛小学校は1990年開校、計画当時の学級規模は72クラス、3000名であったが現在は78クラス2700名の児童が在籍する。敷地23049㎡を有する地下1階、地上4階の建物で、日本でいう過大規模校の2倍に相当する学校である。RC構造の校舎壁面は、2種のピンクを基調としたタイル張り仕上げで赤い屋根煉瓦と調和して、現代的な都市景観を生み出し、この学校が「地域の核」であることを強調している。周辺学校の教育環境の改善モデル校としての環境整備及びコミュニティとの関わりを持つ、地域に開放する学生活動センターも配置されている。

学校は教職員の管理、幼稚園小学校児童の教育学習及び屋外学習活動のために3つのブロックで構成されている。一般教室は2～3教室を1単位として配置され、従来の長い廊下では味わえない児童に見合ったスケール感をつくり出している。

台湾の学校施設の特徴は、バルコニーのような半野外形態の廊下が多く、展示・掲示の生活空間、ギャラリー、腰掛け等が設置され、生活感を生み出している。クラス集会、登下校、朝の会によく利用されている。課題は広い分、採光に対する配慮と、高層化傾向のため、園庭から遠くなることが指摘できるが、見下ろす中庭景観は素晴らしい。

また、北と西側校舎の動線である渡り廊下が校舎の機能性を引き出し、校舎外観の活気をつくり出している。特記すべきは、ところにより膨らませた廊下や屋上、ピロティ、地下スペースを学習・遊び空間スペースとしてフルに活用して教師のカリキュラム編成と組立及び学習環境への工夫が随所に見られた。

台湾の開放革新的教育への熱意と今回の熱烈歓迎に対し、全個連・教育環境研究所として、できる限りの支援を行っていききたいと考える

(東京・小山)

博愛小学校の施設と教育



博愛小学校の教育 (土曜日の部活動を中心に)

78学級、児童数2694名、職員120名の本校は台北市の官庁街にある。

敷地面積7250坪に廊下、ピロティー風の空間をふんだんに取り入れた4階建ての校舎は明るく、子供たちの姿は余裕のある敷地から、大変少ないという印象であった。

訪問した12月27日は土曜日で部活動のみの日課であった。正門を入った所のピロティでは、われわれを待って黒帯姿の先生と掛け声も勇ましく得意げな中学年の武術の部活が展開された。次の廊下ではチョーリンという昔からの伝統的な遊びを、その次は小麦粉を原料とする造形遊び(文部省からの掲示を受けての)で干支のにわとり作りが行われた。

次の3・4時間目は高学年の部活の時間であり

5年の選抜メンバーによるコーラス部と器楽部が見事な演奏を披露してくれた。また、男子もいる生け花部では豪華なバラのブーケ作り、2年生では冬至のだんご(台湾の習慣)を作ってご馳走してくれた。これらの部活動の時間はすべてPTAのボランティアで行われているとう。

ちなみに台湾のPTAは学校の不足するところを支援する組織であることが法律で義務づけられており、博愛小では、部活、遅れた子の指導、毎日の下校指導、運動会などの支援を得ているという。参観したところ、みな、一斉指導だが、30人の学級のためにボランティアも複数おり、一人一人に目がいきわたっている感じであった。

(千葉・橋本)

台湾の歴史・文化 呉明修先生の講演から

呉明修先生より、台湾の風土、歴史、産業教育などについて説明を受けた。

台湾は、九州とほぼ同じ面積で、亜熱帯に属し一年を通して温暖な気候である。人口は約2千万人ほどで、数年来増加の傾向にある。

原住民しか住んでいなかった台湾に、国家が形成されたのは二度、一度は1661年鄭成功による統一であるが、すぐに清朝に制服されたその後日清戦争を経て日本の領土となる。この時代は日治時代と呼ばれており、鉄道の整備など産業の基盤が築かれた。戦後、大陸を追われた蒋介石により中華民国が継承され、今日に至っている。従って建国の祖は孫文であり、台湾では国父といわれている。

現在、台湾の産業の発展は著しく、GNP 5%以上の高い成長が続いている。農業国から工業国へと急速に変化しつつあり、社会資本の整備もめざましい。特にコンピュータ関連の産業は、成長株である。

また、平野の少ない台湾では、台北市をはじめとして、児童数千人以上の学校があたり前である。日本と同様の教育制度であったが、受験重視、学力過重の弊害もあり、選択の幅をもたせた複線型に移行しつつある。

(埼玉・松浦)



講演する呉明修先生

全国個性化教育研究連盟海外研修も今回で7回目を迎えました。原則として1年おきに行っていますが、相手国の学校事情もあり連続して行う年もあります。

2000年に台湾にオープンスペースの学校が完成いたしますので、その時は、日台合同で研究会を開催する予定です。なお今夏はヨーロッパの学校視察を予定しています。

有意義だった台湾研修

今回の研修旅行が初めての私にとって、見るもの聞くものすべてが未知の世界だった。何もかもが新鮮で興味深く、他の先生の話の聞いていただけでもおもしろい。

お会いした台湾の先生方は非常に親切で明るく、とても勉強熱心に見える。子供たちは中国語の四声のせいなのか表現力が豊かに思えた。

学校には、蒋介石の像がある。一体、歴史はどう教えられるのであろうか。日本よりも厳しい受験戦争の中、生徒たちはどんな思いでいるのだらう。私の興味は様々な方向へと飛んでいく。

もっと、もっと勉強したい。今そんな思いに駆られている。私の中で一つの転機となる貴重な体験だった。無知な私を温かく仲間に入れてくださった先生方に感謝している。

(京都・向井)

台湾研修に参加して

全個連のみなさんの研修会に会員外であったが参加させていただいた。今まで会の内容について少しは知っていたが今回の研修会に参加してこの会のすばらしさに感激している。空港での熱烈的な歓迎からスタートした台湾の会員の先生方の活動や教育局の方々との連携、並びに各学校での研修内容などを振り返り、時代をリードする研究活動をしていることに、改めて全個連のすばらしさを実感した。

加藤先生、高浦先生を先頭に中澤先生の緻密な計画、そして河合先生の活動報告と学ぶことが多くあった。おかげさまで初参加の私もみなさんと一緒にたくさんの研修ができ大変感激している。感謝とともに今後の会の発展を心からお祈り申し上げたい。

(埼玉・橋本)

台湾の先生方の人柄に接して

歓迎のポスターと花束を持ち、空港に出迎えてくれた台湾の先生方の姿に、私たち全個連の一行は、感謝の気持ちでいっぱいだった。いつも流暢な日本語で案内してくれた簡先生をはじめ台湾の人達に感心した。

早速、学校訪問、どの学校も非常に歓待してくださり「熱烈歓迎」の看板が目についた。

ホテルにも、素敵なお花のアレンジメントと南

国のフルーツの盛りかごに、会員からのメッセージが添えてあったり感動することしきり。

教育局表敬訪問、昼食会でも心こもった接待を受け、意義ある時間を過ごした。その上贈り物まで用意していただく。

開放教育連盟の理事の皆様や会員の方々々と日本と台湾の教育交流会を心ゆくまでできたような気がする。みなすばらしい人柄の先生方のおかげで楽しく有意義な研修旅行ができ嬉しく思っている。

(東京・橋本)

研修から学んだこと

第七回海外研修旅行の台湾に同行させて頂き実質的な研修ができた。また、現地のすばらしい学校の見学、先生方との交流など親睦を深めることができたことに先ず、お礼を申し上げたい。

いろいろ研修した中で、特に印象が強かったのは、台北市の教育行政関係の方々台湾のこれからの教育に対しての展望の偉大さと情熱である。そして、そのエネルギーが基になって21世紀に向かっての施策の1つに「開放革新的な国小教育」を明確に打ち出し、一人一人に子供を大切に、伸ばし育てようとする姿勢がよく理解できたことである。

2日目に見学した博愛国民小学校は、それをねらいとした姿、実践が如実に伺い知ることができる。恵まれた環境に建つ立派な学校・施設その中で一人一人の子供が明るくのびのびと自分を表現している学校生活を見て、教師の取り組みの熱心さにも頭の下がる思いを実感した。実によい研修をすることができた。

この研修を機会にして、全個連の存在、活動内容等を教育環境所の立場からも、全国の小中学校に紹介しながら自己研修を深めていきたいと思っている

(東京・菊池、)

今回の研修に際しては、台湾の簡馨瑩先生を中心に、多くの先生方にお世話になりました。その温かい歓迎ぶりに私たちは、ほんとうに心を熱くいたしました。また、リコーの山梨さんご夫妻にも、さまざまなご協力をいただきましたこと厚く感謝申し上げます。